

# 図書室月報

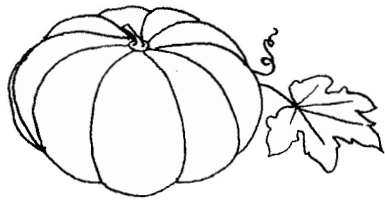
2020年(令和2年)11月5日

第690号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

## 『13歳からのアート思考』に参加して

上村 碧



今回のつどいに参加して、ずっとモヤモヤしていた気持ちがつつと晴れた。というより、以前末永先生の『13歳からのアート思考』を読んだ時にそのモヤモヤはすでに晴れていたが、今回のつどいでさらにすっきりと思考出来るようになった気がする。

私は20年近く学校教員として勤めてきたが、知識を詰め込む教育の在り方にずっと違和感を感じてきた。その違和感は子どもの頃からずっと持っていた。小学校に入ってから高校までの間もずっとモヤモヤしていた。学校の授業は本当につまらないなど感じていた。大学に入ってから初めて、あ、自分の興味のある勉強がやっと出来る、勉強したいことを選んでいいんだ、と思った。なんで小学校から高校は学ぶ内容が全て決められていて、自分の興味から学ぶことを始めてはいけないのだろうか。最初から決まっている正解をひたすら暗記する、その暗記が得意な人は一流の大学に行けて、一流の企業に勤められる。それが幸せな人生だ。こういう

考えが主流な時代に子ども時代を生きてきた。最近はどうやく問題解決型学習とか主体的な学びとかが謳われ始めたが、学校の現場の教師達はそんな新しい教育方法を試す余裕もないほど、様々な業務に追われている。理想を追う余裕がない学校現場の状況を教育政策を決める人たちはどう見ているのだろうか。教師がこんなに忙しくてはどんなに素晴らしい教育理論も実践にうつせないだろう。

とはいえ、教員になったからには、細々とでも自分の理想を追い求めたい。末永先生の言うところの、「花職人」を育てるだけが教育者の役割なら、なんて味気ないだろう。「アーティスト」を育てるための栄養を与えられるのが教師のしごとではないだろうか。生徒達には様々なタネを持ち、しっかりとした根っこを生やしてほしい。その土壌に栄養を与えることが出来たら、教師の仕事は本当に面白いものになる。

の授業は週に1回とか2回しかない。私は美術や音楽が大好きだったので、ほかの教科の時はひたすら我慢して、美術や音楽の時間だけを頼りに、学校の授業をやり過ごしてきた。

末永先生に教わった生徒達は本当にラッキーだと思う。私は末永先生の「アートという植物」の図を見ただけでとてもわくわくした。こんな話をしてくれる先生に出会えていたら、勉強がもっと好きになっていたら、勉強がれない。世界は全部つながっていて、いろんな教科の知識が自分なりの花を咲かせる材料になると知っていたら、嫌いだっただけ数学や理科も面白く思えたかもしれない。

今後末永先生の「アート思考」が大人にも子どもにもどんどん伝わって、世の中の人それぞれが興味・好奇心・疑問のタネでいっぱいになったら、日本はもっと生きやすくて、面白いところになるだろうと感じる。生きるヒント・考えるヒント満載の講座を本当にありがとうございます。

ブッククラブから

## 井上靖著『敦煌』

清水佳子

900年の時を経て千仏洞の石窟から発見された多数の敦煌文書。この出来事自体が十分劇的であるが、「なぜ数多くの文書がそこに隠されていたのか」という経緯を華麗に美しい物語にしたのが、この『敦煌』という作品である。

西域の地で、三人の男、趙行徳(主人公)、朱王礼、尉遲光の生き様が描かれる。彼らは時に死を恐れず、それぞれが信じる道を力強く突き進んでゆく。まさに西域ロマン。読み始めれば、砂漠の乾いた風が頬にあたるような、駱駝に揺られながら地平線を一心に見つめているような、自由で静謐な気分になる。文章も品格があり美しい。

主人公趙行徳は科挙合格を目指していた秀才である。試験に失敗したあと、偶然出会った西夏の女から得た西夏文

字に惹かれ、西方への旅が始まる。趙行徳のあり方は「人間万事塞翁が馬」を思わせる。朱王礼や尉遲光ら行徳本人とは全く違うタイプの、災難のような性格の(でもそれがたまらなく魅力的な)人物との出会いがあり、為されるがままに導かれてゆく。高級官僚になる夢があっけなく破れたとき、西夏へ行くために入った軍隊で自分の無力さ(戦う場面では全く役にたたない)を知ったとき、恋した異民族の王族の娘が自殺したとき、それぞれの場面で本文中には主人公の気持ちの描写はほぼない。ただ、淡々と流れていくそのうちに、自分にとってだけの人生の意味を探し続けるその儚さに気づいていくようだ。最後に、趙行徳は突き動かされるかのように、海千山千の砂漠商人、尉遲光を騙して、経典を戦火から

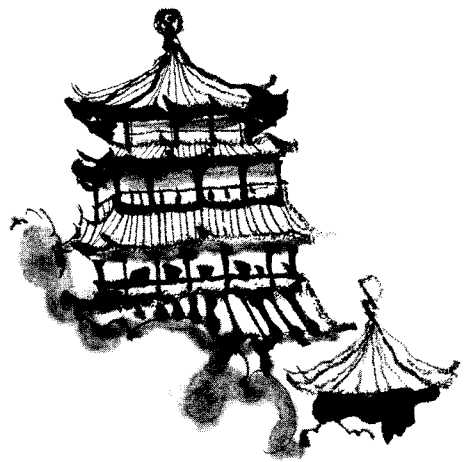
逃すために洞窟に隠す。それが、後にそれまでの東洋学を覆す歴史的な至宝として世を歓喜させ、趙行徳は未来への宝を守り残した男となる。一生懸命に生きる人間の一つひとつの儚い努力や思いが未来に繋がっていく、という感動が胸いっぱい広がる読後感である。

講師の解説では、美しく多くの人に読まれたこの作品は、一方で、純文学論争で痛烈に批判された作品であることを知った。この美しい物語が、純文学ではないと批判された、一瞬信じられなかったが、ブッククラブの参加者からも下記のような感想がでた。

「西域ロマン版の水戸黄門である(語学の才能が印籠替わり)」  
「歴史小説としては不完全」  
「ストーリーが都合よすぎる」

言われてみるとその通りで、非力な主人公が、死者多数の戦闘シーンで必ず生き残る。占領した城内で、助けた女性が王族でなおかつ主人公を愛するようになる。主人公が適当に入った軍隊で、主人公の隊長朱王礼はどんな出世していく。など、すべてがうまく行き過ぎる、ご都合主義的な感じがしないでもない。

そうはいつても、この都合のよさは物語だからこそであるとも思う。敦煌の石窟から発見された仏典や記録も文字、物語のきっかけも一見風変わりな西夏文字という文字、そして今それを小説という形で読むことを可能にしていくのも文字。空間、時間を自在に飛び越えていく文字の力を背景に、大きな時の流れに身をまかせ、たゆたう感覚を味わえる作品である。



新着図書から

<p>加害者家族を支援する 阿部恭子(岩波書店) 368</p> <p>被害者家族を支援する 橋本嘉代(書肆侃侃房) 367</p> <p>なぜいま家族のストーリーが求められるのか 内田樹(中央公論新社) 367</p> <p>街場の親子論 内田樹(中央公論新社) 367</p> <p>Woman, ここにいる私 ナショナルジオグラフィック編著 (日経ナショナルジオグラフィック社) 367</p> <p>国家と移民 鳥井一平(集英社) 366</p> <p>人、場所、歓待 金賢京(青土社) 361</p> <p>人、場所、歓待 森井梢江(企業通信社) 336</p> <p>こんな対応絶対ナシ! パワハラ・セクハライラスト事例集 高橋均(旬報社) 335</p> <p>競争か連帯か 小峯敦編著(晃洋書房) 331</p> <p>戦争と平和の経済思想 清田浩司(平凡社) 326</p> <p>塀の中の事情 小峯敦編著(晃洋書房) 319</p> <p>避けられた戦争 油井大三郎(筑摩書房) 319</p> <p>平成時代の日韓関係 木村幹編著(ミネルヴァ書房) 311</p> <p>不安の時代の抵抗論 田村あずみ(花伝社) 311</p> <p>ファシズムの教室 内野大輔(大月書店) 311</p> <p>リスクの正体 神里達博(岩波書店) 304</p> <p>香港の歴史 ジョン・M・キャロル(明石書店) 222</p> <p>僕の町の戦争と平和 志田寿人(東京図書出版) 289</p> <p>日本の開国と多摩 藤田寛(吉川弘文館) 213</p> <p>二枚腰のすすめ 鷲田清一(世界思想社) 159</p> <p>ファシズムと聖なるもの/古代的なるもの 平藤喜久子編(北海道大学出版会) 160</p> <p>批判的思考力を育てる学校図書館 渡邊重夫(青弓社) 018</p> <p>アーカイブズと歴史学 小池聖一(刀水書房) 017</p> <p>〈哲学〉 心理学 宗教</p>	<p>災害とアートを探る 赤坂憲雄編(玉川大学出版部) 369</p> <p>支援と物語(ナラティブ)の社会学 水津嘉克(生活書院) 369</p> <p>赤ちゃんポストの真実 森本修代(小学館) 369</p> <p>貧困・外国人世帯の子どもへの包括的支援 柏木智子編著(晃洋書房) 371</p> <p>生活綴方で編む「戦後史」 駒込武(岩波書店) 371</p> <p>文学はいかに思考力と表現力を深化させるか 高橋正人(コールサック社) 375</p> <p>この子はこの子のままでいいと思える本 佐々木正美(主婦の友社) 379</p> <p>「本読み」の民俗誌 川島秀一(勉誠出版) 382</p> <p>〈自然科学〉 全国認知症カフェガイドブック コスガ聡一(クリエイツかもがわ) 493</p> <p>〈工業〉 捨てられる食べものたち 井出留美(旬報社) 588</p> <p>季節に寄り添う韓国茶 コウ静子(グラフィック社) 596</p> <p>〈産業〉 JR中央線沿線なぞ解き地図 小林克己監修(昭文社) 686</p> <p>〈芸術〉 世界を歩く、手工芸の旅 青幻舎編集部編(青幻舎) 750</p> <p>〈文学〉 ぜんぶ本の話 池澤夏樹(毎日新聞出版) 904</p> <p>古井由吉 (河出書房新社) 910</p> <p>休息のとり方 福岡健二(而立書房) 911</p> <p>星に仄めかされて 多和田葉子(講談社) 91た</p> <p>十字街 久生十蘭(小学館) 91ひ</p> <p>カケラ 湊かなえ(集英社) 91み</p> <p>虫とゴリラ 養老孟司(毎日新聞出版) 91よ</p> <p>屋上で会いましょう ジョン・セラン(亜紀書房) 92セ</p> <p>N・ホーソン 「七破風の屋敷」と徳田秋声「あらくれ」 斉藤繁(中央公論事業出版) 93さ</p> <p>そよ吹く南風にまどろむ ミゲル・デリーベス(彩流社) 96デ</p>
--	--

くにたちブッククラブ

—空間を超えて世界と向きあう文学—

宇野千代 『色ざんげ』 (岩波文庫)

講師 <sup>かない</sup>金井景子  
(早稲田大学・日本近代文学)

とき 11月12日(木) 夜7時半~9時半

定員 30名 (今年度申込済の方は申込不要)

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

沼田真佑 『影裏』 (文春文庫)

講師 佐藤泉  
(青山学院大学・日本近代文学)

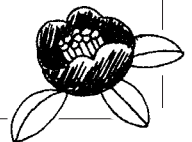
とき 11月27日(金) 夜7時半~9時半

定員 30名 (今年度申込済の方は申込不要)

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

\*次回は12月10日(木)石川達三『生きている兵隊』(中公文庫)です。



図書室のついで

『日曜俳句入門』



お話 吉竹純

(コピーライター、俳句・短歌愛好家)

今ブームとなっている「俳句」は日曜俳句(新聞・雑誌・テレビ番組への投稿)という現象でも広がっています。

以前は一部の投稿者に限られていましたが、現在の投稿者は100万人とも言われています。

講座では新聞投稿の魅力、文壇での位置づけ、楽しみ方について紹介していただき、投稿に対する姿勢、ヒントを知り参加者の方に投稿を始めるきっかけとなればと思います。

\*俳句の作り方に関する指導はありません。

〈吉竹さんの本〉

表題作(岩波書店)『投歌選集 過去未来』(河合書房新社)、『日曜歌集 たび』(港の人)

とき 12月19日(土) 昼2時〜4時

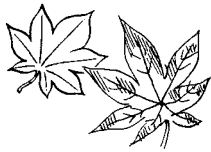
ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 11月19日(木) 朝9時〜

公民館 ☎(572)5141

\*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。また、マスクの着用をお願いします。

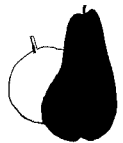


〈私の本棚から 第2回〉

大田堯・山本昌知 著

『ひとなる』

ちがうかかわるかわる』



石井翔梧

本書は、一昨年に100歳で亡くなられた教育学者の大田堯氏と、岡山県で患者主体の精神医療を長年実践してきた精神科医の山本昌知氏による対談本である。人の生命に関わってきた両者が、それぞれの視点や経験から、教育や医療、福祉の在り方や、人間の育ちについて語り合う。タイトルの「ひとなる」とは、「子どもがひとになる」すなわち「成長する、育つ」という意味の古語であり、岐阜や愛知の一部では、方言として現在も残っている。「ひとなる」こと、それは人類すべてに通じる願望なのではないかと大田は語る。

そして、この対談を貫くテーマとなっているのが、「ちがう・かかわる・かわる」という言葉である。大田は「ちがうこと」「かかわること」「かわること」こそ、生きものの根源であると述べる。まず、「ちがうこと」について。人間は自己中心であり、「みんなちがってみんないい」ではなく、「断固としてちがう」ものであるという認識から出発する。しかし私たちは、自己中心的であるにも関わらず、他者に依存しなくては生きることのできない存在でもある。「ちがうこと」を前提に「かかわること」が必要である。そして、自己中心と他者依存の折り合いをつけた瞬間に「かわる」。これらのプロセ

スを生き物は生涯続けているらしい。とても哲学的な内容だなと感じたが、これらの考え方のベースにあるのは、分子生物学でのDNAの研究であるという。人間のDNAにある情報は、様々な経験を経て終生変わっていくのだと言う。人間の内面や精神を、自然科学からの示唆を得て論じている点がとても興味深い。

「かわる」=「良くなる、改善する」ということではない点に注意したいと個人的に思う。本を読む中で「もっと良くしていかないと!」「自分のことを改善しないと!」という進歩主義的な価値観を内面化している自分に改めて気付かされる。もちろん「変わりたい!こうなりたい!」という気持ちは人が成長する上で大切である。しかし変わること執着し過ぎると、変わらない自分が嫌になったり、自分が本来持っている特性を見落としてしまうことにもなる。様々なものと「かかわる」ことで「かわる」ということは、自分が思った通りに変わる訳でも、他者によって恣意的に変わられる訳でもない。3年後くらいに本書を読み返してみたい。その時の自分がどのように「かわって」いるのか。本書にどのような感想を持つのか。その時になるまでコツコツと年を重ねていきたい。(藤原書店)

係から

すっかり秋になりました。お気に入りの本を読み返したり、気になっていた本を読んでみたりと読書の秋を満喫しませんか。

